

「じよもの詩」コンクール応募作品資料

《中学校》

お父さんの汗

氷川町立竜北中学校

一年 村崎 真子

お父さんが仕事から帰ってくる

夏はいつも汗だくだ

わが家は農家でネギを作っている

今日も畑で一日中

太陽の光をいっぱい浴びたんだね

元々は色白なお父さんだったけど

今は真っ黒に日焼けしている

ネギの匂いがぶんぶんするけど

それが小さい頃から感じるお父さんの匂い

汗の臭いもするけれど

それは一生懸命働いたお父さんの匂い

「お父さんありがとう。」

家族のために汗と泥にまみれて

働いているお父さん。

かっこいいよ。」

(第三十五回入賞作品)

お母さんの手

氷川町立竜北中学校

一年 下田 圭祐

ぼくが探し物をしていると

「ぶっつけたの?」と言って

手をさしのべていっしょに探してくれる

宿題の量が多くて

「もうイヤだ。」といらいらしながら

机に向かっている

「がんばれ。がんばれ。」と言って

背中をさすってくれる

お母さんのあたたかくて優しい手

でも時々ぼくが言うことを聞けなくて

文句ばかり言つと

「ドン!」とテーブルをたたき手

食べ物をそまつにすると

げんこつになるときもある

でも ぼくが高熱を出して

辛かったとき

「大丈夫。大丈夫。」と言って

頭をなでたり 冷やしたタオルを顔や頭に

ずつとあててくれた

お母さんのやわらかい安心できる

手があった

ぼくが大人になったとき

お父さんやお母さんに

あたたかい手をさしのべられると

いいなと思ってる

(第三十四回入賞作品)

ゴルフ

学校法人文徳学園文徳中学校

一年 片山 千華

お父さんの趣味であるゴルフ

毎週日曜日に一人でゴルフに行くお父さん

リビングの鏡に向かって日々素振り

おしりをフリフリさせながら

とても変な動き

すごく真面目な顔

そこがまた面白いけどじやまだ

家では陽気で面白いお父さん

我家のお笑いの大黒柱だ

ひまだった日曜日

お父さんのゴルフに私も行ってみた

一から十まで教えてくれるお父さん

自分はいらないで私を指導している

とても熱心なお父さん

ほんの少しカッコよく見えた

いつからか

ゴルフについて行くようになった

私が行く日は嬉しいのか

テンションが高く

鼻歌を歌っている

ちよっぴり変なお父さん

グリーンの上で

お父さんとすこす時間か

今は最高に嬉しい

(第三十二回入賞作品)

母の待ち受け

学校法人文徳学園文徳中学校

二年 宮崎 泰己

母のこだわりは

スマホの待ち受け画面が

僕であることらしい

機種が変わっても僕の写真

「恥ずかしいからやめてくれ」

と言つても

「これを見ると元気が出る!」

と笑つてかわす

最近僕が父に似てきたらしく

微妙らしい

「小さいときは可愛かったのに・・・」

少々ぐちが増えてきた

母のスマホには

僕の写真がいっぱいある

僕の友達との写真

泣いている顔や

歯が抜けている顔

昔の写真を見ながら

母の顔は

ニヤけたり

思いにふけったり

きつと

僕が生まれてからの成長を
思い出しているのだろう

「いい加減恥ずかしいから」

と言っても

写真は増えていくのだろう

「小さいときは可愛かったのに・・・」

と言いながら

画面を見る光景は

これからも・・・

(第二十九回入賞作品)

頼ってよ

氷川町立竜北中学校

二年 平田 愛琉

お父さんが倒れた瞬間をこの目で見た

私はすぐに駆けつけたけど

あなたは真つ青な顔で気を失っていた

私は頭がパニックになって

どきどきがとまらなかった

兄が救急車を呼んで病院に搬送された

私は家で待機

長い長い待ち時間の後

病院で会ったお父さんは

「大丈夫。大丈夫だから。」

と繰り返していただけれど

本当に初めてのこと

涙がとまらなかった

私たちを安心させるために

お父さんが

優しい言葉をかけてくれたこと

本当に嬉しかった
でも

倒れる前々日からひどい高熱が続いて

病気だったのだから

きつかったはず

頼ってほしかった

自分でできることはちゃんとするし

手伝つから

しんどいときはちゃんと saying ね

お父さん

いつでも元気でいてほしいから

(第三十五回入賞作品)

私の好きな風景

竜南中学校

二年 熊谷 寿々乃

庭で咲いた小さなバラを

母さんがうれしそうに

そとつみとって

台所やトイレにかざるんだ

「かわいくて、いいにおいでしょ？」

にっこり笑うその顔は

バラよりももっと優しく

私の心もふんわり明るくなる

バラは小さいけれど

母さんの手にかかる

家中が優しい空気に包まれる

特別な日じゃなくても

なんでもない日が

ちよつとすてきに見える

母さんのバラがある風景
それは私の大切な宝物

(第三十六回入賞作品)

距離

熊本市立託麻中学校

三年 有村 葉奈

母とはこれまでも何度が喧嘩をした

その度に私は泣いていた

母が理解してくれないことへの怒り

言い負かされてしまった悔しさ

自分自身への反省

理由は兎に角たくさんあった

だけど母との喧嘩と

友達との喧嘩は訳が違う

頻繁にするにも関わらず

毎回次の日にはいつも通りだ

私にとっては不思議だった

そんな中 一つ思い当たったのは

心の距離だ

心の距離が近いからこそ

お互いを想ってよくぶつかると

心の距離が近いからこそ

次の日には笑って話せる

今 受験という

人生の分岐点にいる私にとって

母と向き合つことはとても重要だ

だからこそ

この心の距離を私なりに大切にしたい

(第三十四回入賞作品)

ドア

熊本市立竜南中学校

三年 平井 心結

部屋で過ごしていると足音が聞こえ

お父さんはやってくる

ドアを開けて何か言つと

ドアを閉めて戻っていく

朝になると

ドアを開けて

「もうすぐ仕事に行くからね。」

と言つて

ドアを閉める

夕方になると

ドアを開けて

「たぐいま。」

と言つて

ドアを閉める

夜になると

ドアを開けて

「もう寝るから、早く寝なよ。」

と言つて

ドアを閉める

中学生になって

お父さんとあまり話さなくなっていた

だからお父さんなりの

コミュニケーションかもしれない

(第三十五回入賞作品)